「青森県八戸市・新井田川散策から考える、川と人間生活」

私の故郷である青森県八戸市は、太平洋側に面した地域で、海山や河川の自然に恵まれている。実家の近所を流れる新井田川は、岩手県九戸郡九戸村雪谷部落から発する雪谷川を源とする、全長約 83 キロメートルの二級河川である。これと並行する格好で、折爪川の麓を南北に蛇行する瀬月内川が軽米町で合流し、青森県に入って南郷村を通り八戸市のほぼ中央を南北に流れて太平洋に注ぐ。命の始まりは水であるが、私を含めて人々は水に対して無関心であるように感じられる。この自然環境を司る水を利用する人間活動を振り返ることを目的とし、以下では、新井田川の現状から課題を考察し「川と人間生活」について論じるとする。

川と人間生活との関係性を考察するにあたり、私は実際に新井田川を散策し現在の姿を描写し考察してみることにした。下りながら新井田川を眺めてみると、この川には複数の顔があることに気づく。言い換えると、一本の川の数箇所には自然と人間、人間同士のふれあいの場が多く存在するということだ。例として、湊町としての新井田川、自然の神秘を感じさせる新井田川、人々の生活の一部となった新井田川を挙げることができる。

まず、湊町の顔をもつ新井田川だ。新井田川にかかる橋のひとつ、柳橋付近には北奥羽ポートクラブの小さなマリーナが見られ、その手前にかかる湊橋から上ノ山を望む景観には「船だまり」がある。それは何かしら心がなごみ、湊町を感じさせた。夜になると、そこに並ぶイカ釣り漁船のライトが照らされ、それは幻想的ともいえる風景であった。

（下流域の景）

（河口付近と市街地方面）

次に、八戸百景の一つに選ばれた花水河原（はなみずがわら）は、新井田川の新たな顔をみせてくれる。ここは、多種の野鳥を見ることができると地元では有名な場所だ。この花水河原の由来には古くからの言い伝えがあって、それは江戸時代にまで遡るという。父によると『八戸藩侯一行がこのあたりに狩猟に来た時、くたびれた一行は新井田川のせせらぎを聞きながら休息し、藩侯がのどの渇きを訴えた。そこで、家臣が水を汲みに布巾の河原におりると、こんこんとわき出でている清水を発見した。さっそく汲んで差し上げると「花のかおりがするような美味な水じゃのお」と、ことのほかお喜びであった』という。この言い伝えから花水河原と呼ばれるようになり、現在もなおこの名は人々に親しまれている。またこの花水河原には「数十年前、秋に遡上するサケが中央の四角い箱に入るように、鉄棒を数百本も組み合わせて作ったヤナ場があった」と父は語る。今はその面影もないかのように静まり返り、緑いっぱいに囲まれた川のせせらぎが八戸の町の喧騒を忘れさせるぐらい、のどかな場所であった。

そして、自然の美しさを魅せる花水河原とは異なり、人々の日常生活の一部ともいえるサイクリングロードという顔が新井田川にあった。新井田川右岸、JR 八戸線新井田橋川の両下から十日市橋までサイクリングロードが続いている。風を切って走るのもなかなか気持ちの良いもので、そこにはサイクリングを楽しむ人、犬を連れて散策を楽しむ人がいる。ここを歩いていると、頭に布をまいた漁場のおばちゃんや半袖短パンのおじいちゃん、小学生から高校生まで他世代の人々を見かける。顔見知りになると、声をかけて挨拶をすることもあるようだ。つまり、このサイクリングロードは、幼い頃から川を身近に感じることができるだけなく、人々との交流の場としても機能していると言ってよいだろう。

（サイクリングロードで散策を楽しむ人々）

このように、八戸市に限って言えば、川とは日常生活の場の一部であり、一人ひとりに想いがあると言ってよい。私自身も、新井田川の中流域に位置する子どもが裸足で自由に遊べる水辺空間で休日は家族と一緒によく遊んだ思い出がある。釣りや水遊びもでき、川の周辺には木があり落ち着ける場所だ。景観がよく、自然が豊かで野鳥ウォッチングや昆虫採集をした。幼少期は海で泳ぐのが怖いと感じていたが、この川の水辺で遊び、両親に泳ぎを教わるなどして楽しい時間を過ごしたためか、今でも川や海に抵抗がなく親しみを感じている。水中をのぞくと、そこにはいろいろな色をした石があったことが記憶にある。私はそれらを拾い集めてビンに入れ、部屋に飾っていた。

実際にインターネットで調べてみると、新井田川には「堆積岩、緑色岩などジュラ紀の岩石が分布しており、その河原の主な岩石は、砂岩、チャート、泥岩、緑色岩、結晶質石灰岩で、かこう岩が稀に見られる[1]」と書かれていた。また、新井田川の主要な鉱物は「斜長石、石英、曹長石、輝石で、モナズ石の年代には 18 億年代のものと 2 億年前後及び 1 億年前後の 3 つのピークがある[2]」という調査結果が記されていた。当時、何気なく手にした石がこのような構造と歴史があることに、驚く。

（新井田川の石）

さらに調べてみると、この地域は過去津波の被害に遭っていることがわかった。そのなかでも昭和 8 年の三陸大津浪、昭和 35 年のチリ地震津浪、昭和 43 年の十勝沖地震津浪は悲惨であったといわれている。新井田川が氾濫し、これらの災害は住民を非常に困らせたという。いつも親しまれている川であるが、時には脅威となることは当時の体験者は身をもって感じたであろう。

（河口付近の津波被害の状況[3]）

上の写真からも分かるように、普段はおだやかな流れの新井田川も災害時には一変して姿を変える。ここからも、水が持つ力の驚異を知ることができよう。

以上のように、現在の新井田川は多くの顔を持ち、自然と人間、人間と人間同士を結びつける役割を果たしていることが分かった。しかしながら、散策して気づいた点とし

---

1 参加型アウトリーチプログラム Sand for Students 砂から見える地球の秘密「砂データ：新井田川」http://www.sand4students.net/ja/data/data004.html

2 同上

3 八戸市ホームページ「三大津波体験記」
http://www.city.hachinohe.aomori.jp/index.cfm/12,1491,43,65,html

て水際にゴミが多かったことが挙げられる。目についたゴミとして、ペットボトルやワンカップの瓶、ビニール袋などがあった。川の流れにもよるが、川沿いに住宅地があることに起因すると考える。きっとこの地域を利用する人々が捨てていったものであろう。ゴミ問題は人間に対してだけでなく、水中にすむ生物や野鳥にも悪影響を与えてしまうことから、この現状は早急に考えるべき点であるといってよい。また、水質汚濁について言及すると、新井田川は過去に全国主要汚濁河川に指定されたことがある。海水を浸入させ逆流を生じさせる現象が見られるこの川の河口付近には膨大なヘドロが堆積しており、亜鉛や鉛・カドミニウムなどの金属が検出されている[4]。さらには、河口付近にある工場群の廃液や生活廃液が下流域に集中的に排出されており、特に生活廃液による汚れが進んでいる。これらの状況から、人間の行為が自然へどのように作用するかが理解できよう。

新井田川散策を通して、改めて私は自然が持つ神秘性と美しさに気づくことができた。同様に、水が人々に与える非日常的なインパクトについても考えさせられる契機となった。先に述べたように、現在の新井田川は、自然と人間・人間と人間を結びつける場を提供する役割を持っていると言えるが、後世においても住民に愛される川であり続けるには市民による環境問題に対する積極的な行動が求められると思う。自分の次世代の子どもたちが安心して川で遊び、自然の偉大さを学ぶ空間を残すためには、ゴミ問題や水質汚濁という現状課題を行政や企業に任せるだけでなく、市民一人ひとりがマナーを守るという意識改革が現状改善の第一条件であると考える。水が人間生活にとって不可欠な資源であることを考えれば、むやみに無関心を装うことはできないのではなかろうか。自然環境を後世に残す財産であると捉えて、今後も川が自然と人間と人間同士のふれあいの場として機能するように、一人ひとりが意識とモラルをもって水環境に対して再考すべきであると思う。そして、いつまでも新井田川が私の大好きな美しい場所であってほしいと願っている。

[4] 中村豪邦『豪さんのわが街ウォッチング』なんぶ未来出版、2003 年。192～194 ページ。